
【イナズマイレブンGO】二人のシード、時空を超えて物語を変える

乃ノ架?竜堂桜華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【イナズマイレブンGO】一人のシード、時空を超えて物語を変える

【Zコード】

N4924N

【作者名】

乃ノ架？竜堂桜華

【あらすじ】

「この小説の主人公とかは、NARUTOのとほぼ一緒です

この小説とNARUTO（）と、一緒です。

<http://syosetu.com/usernoveldataid/1696876/>

設定 愛風那月

【人物】
一人目の主人公
ヒロイン
愛風 那月
あいかぜ なつき

【性格】
神童拓人が大好きな中学二年生。
いつもテンションが高く、ポジティブ
ボケ役

可愛い服とか靴とか揃えるのが好きで、部屋には靴や
服が沢山ある。

黄色＆ピンク色大好き

【服装】
カシュクールベストアンサンブル（黒色）に、短いジ
ーパン（ポケットの所に星のチーン
提げている）の下に黒色のタイツ（？）着用。
OPの星型ショーツ（黒色）

【必殺技】

シユート技
・デスマジック
デスマジックより強力な闇の最強必殺シユート。
破壊技
も兼ねている。
通称“破壊技”

サンシャインループ（光の道）
デスマジックと同じぐらいの破壊力。

こつちは水と星をイメージした技。

このショートも最強必殺技でもあって、今まで誰も止めた事が無い。

ブロック技

スター・ブロック

ショートを止める技。どんな化身用いる技でも全てを止める。

大きな星が現れ、そのショートの威力を弱める。

突破技

マジックトリウス

変な空間でいくつものドアから主人公が出て来ては相手の隙を付いてボールを奪う。

“光”の化身
聖歌女神『ネリアス』 オファーニモンです。具体的に
言えばW

・白く大きな翼があり、堅い鎧（見たいな奴）で腕が4本
?あり、奏者マエストロみたいにタクト?を持っている。

化身用いる技

・メデウコースハーモニ

一回転しながら周りには音符と星が輝いてる??

・ネーリオクス

ハーモニクスと似てる。

”闇”の化身

- 墮天皇歌『ネリオス』 デーモンです
- 左肩にある星が特徴。

・ダークノヴァ
翼を羽ばたかせる感じ。どんなGK技でも引き裂く。

・エンボルトダース
星をイメージに作られた技。
星型のコースが出ては、高速でゴールへと向かう。
ゴールから遠く離れてれば、効果は上がる。

もう一体の化身

露時雨ノイヴァ

・（ナルトの三代目火影のあの術の、 、死神だと思つて下さい ｗｗｗ）

この化身を余り見せる事は無い。

化身用いる技

・ブラストナイト

闇の中に、燃え輝く炎が相手を吹き飛ばす（？）

【愛風那月について】

NARUTO同様、ボケ役の元気でテンションが高い中学一年生の女の子。

成績優秀でサッカーが大好きだけど、余り人に見せようとはしない。

よく妄想が激しそぎて親友の雲雀リタの話を聞かずに居て、リタの殺氣+本の角で頭を殴られる事もしばしば；

その他は明るくて、一部の人には優しい。

している。

嫌いな奴は気だち落とすのが那月流。

学校では本当は制服のはずだけど、彼女の趣味で私服に

設定 雲雀リタ

もう一人の主人公・ヒロイン

【名前】 雲雀リタ（ひばり・りた）

【性格】 冷静で、那月と正反対。

ときどきキャラが崩壊したりする事もしばしば…。
リタの趣味で男装をしていて、口調まで男風で敬語。
家では女子服で着物を着ていることも好くある。
そして家では普通の敬語で、話さなくなる。
サッカーは微妙だけど、やらないであつて強い。
那月を怪我させないように守っている…。

【服装】 学ラン（真っ黒）

【技について】

・ 生吸符

敵に当てて、体力を吸い取り自分の物とする。

・ 精吸符

技を受けて、その技を自分の物にする。

・ 幽幻符

一時的に敵の速度を遅くする

化身

風塵封縛フォンテイル (ふうじんふうめい)

- ・着物を着ていて、髪の毛はお団子ヘアード、手には

札を持っている

技：霸王籠月槍

- ・ボールを高く浮かせて、化身の持っている札を槍に変えて、槍を付いてるようにボールを蹴る。

技：蒼華月爆封

- ・ボールに水を纏わせ、高く蹴り上げてから叩き落す。叩き落すのと同時に水が広範印に広がって相手を田くらまします。

ズ)

化身名 煌華月衝ヴォイシズ (こうかげっしょうヴォイシ

ズ)

肌露が多めの服を着用。

技：雷神月詠華

空中から雷とともに落とす。

月破紫雷足

地面に落ちているボールを上から勢いよくバウンドさせ、ショートする。

化身名・アイン・ソフ・アウル

マフラーを付けていて、腰に刀をつけていて、肩が肌露をしている。

第1話 プロローグ

その日は、委員会の仕事で私とリタは夜遅くまで残っていた

だけど、私とリタにとつては良い日だった

なんと… 今日は30年に、一度しか見れない日だつたから…

キンコーンカーンコーン

リタ：「そうだね。早めに屋上に行こうか。」

本来、なら屋上は立ち入り禁止のはずなんだけど……

屋上でしか見れない、とても綺麗な流星群を、見たかったから

だけど…返つてあんな悲劇が、起じるとは思いもしなかつた…

リタ：「すゞいね。たくさん流れてるね。」

那月：「うわー！…やっぱり、屋上はきれいだね」

リタ：「うん。すゞいきれいだね」

すると、リタが、フェンスに歩み寄ってフェンスに体重を、掛けながら「那月、こっちにいで」と言いながら、手招きをしていた。

私が近づきながら「何、リタ？」といった瞬間、フェンスのネジが緩み、リタが屋上から落ちそうになつた。

私は、無我夢中で「リタ危ない！…」と言いながら助けに行こうとしたけど

一緒に、巻き添いになつてしまつた…

第2話 自称“紙様”…訂正、神様。

私は…目覚めると星型の綺麗な柄で揃えられた部屋に居て、お嬢様とかが使っているようなベッドの上で寝ていた。

しかも天蓋ベッドだつたという

だけど私は黄色とか星とか大つ好きだから、それ以外は気にしない
んだけど

私は起き上がり、ベッド付近にあるPCが置かれた一つの机とその左横にある勉強机らしき机の上を見た。

そこには『DEAR 愛風那月君へ FROM 神様より』とか
書かれた訳の分からぬ封付きの手紙が合つた。

そして私は口にして読んでみた。

『拝啓、愛風那月君。

どうだね？この部屋を気に入ってくれたかな？

わたしは、君が星と黄色の色が好きだと聞いた物で揃えてみたのだが…。

…ああ。紹介が遅れたね。

わたしは皆から“神様”と言われているのだよ。まあ神様とでも何でも好きに呼んでくれ。

さて…本題に入ろうではないか、那月君よ。

ここは“イナズマイレブン”の10年後の世界なのだよ。凄いだろ？何故君たちをここに呼んだのかといつて…そちら辺の人間より、状況が把握出来ているようだからね…。

それにもこの世界に飛ばしておいたのは君とその親友の…雲雀リタ君？も一緒になのだよ。

最後に。この一軒家を一人で自由に使いたまえ。そして君たちは雷門中学校の転校生として入るのだよ。今日は入学式でもある日なのだから…。

ちなみに中学一年生だよ。わたしの親戚と言つてあるぞい。今日から命一杯楽しむが良い。

神様からでした～！～『

以上、

那月：「…はあ…どうこう事！？」

確かにイナズマイレブンGOの世界にトリップ出来たのは嬉しいけどさ…何この自分勝手な紙様は…！！

…訂正。神様W

那月：「にしても…綺麗にしてくれてるね…」
タンスにクローゼット。机が一台でPC付き。
おまけにカーペットも壁紙も黄色とオレンジ色の奴で、星型付きな

んてねー…。

凄いね～…」

感心していた時、ドアが物凄い音を立てて誰かが入つて來た。

そこにはいたのは…正真正銘、リタだつた。

リタ：「何なのよ、この手紙は…おまけに“神様”だと名乗つてさ…！」

30年に一度しか見れない流星群はどうしてくれるのよ…？」

そう言いながらバンッ…！…といつ音を立てながら、私宛の手紙の近くに置いた。

リタは本当に激怒してこのよつで、さつきから腕を組みながら舌打ちを連発していた。

だけど私は目の前に…死んだはずの友達（親友）が居て、嬉しくも思つた。

だけど…こんな不陰氣で言つのはちよつとかな…。

また後日、言えれば良いかな……？

那月：「ねえリタ？」

リタ：「なあに？」

那月：「この手紙では、確かにここはイナズマイレブンの10年後の世界だつて言つてたよね……？」

リタ：「…………ええ。そうだけど？」

那月：「てことは、イナズマの最初の話、京介が現れて雷門サツカ一部を潰すんだよね……？」

それにこの手紙によると、今日がその入学式で……

リタ：「…………今は何時……？」

那月：「07：30」

リタ：「入学式、08：00からだよ……急いで支度をして行くよ……勿論、雷門中に……！」

那月：「え、あ、うん！……」

そのままリタはドアを閉めていくと私はクローゼットの中から可愛い服を取り出した。

那月：「これが確か雷門中のバッグなんだっけ……？」

しかも運良くというより紙様つて人だと思うんだけど、その人がわざわざバッグの中に書籍所とかそういう転入届とか居てくれてるし……

それにわたしのではないけど、筆箱やら下敷きやらファイルやらつて……

つて時間……！……

私は急いで玄関らしき所に向かった。

那月：「リタ早く……」

そう言いながら靴を取ろうとしたとき、ある事に気づいた。

両側に【那月】って書いた字と、【リタ】って書いた靴箱いれがあつたからだつた。

私はお構いなく、【那月】と書いてある靴箱のドアを開けて、田の前にあつた可愛らしい星型の靴を取り出した。

現世でだつたら、中学生の子とか高校生の人たちとかが履いてそうな靴なんだよね~ www

そんなことを考へて、リタが慌ててやつてきた。

…のは良いんだけど…。

那月：「リタ…何その格好…」

リタ：「え？何つて…男装だよ？」

那月：「見て分かるつ…－…－…じゃなくて…何で男装なの－…？」

リタ：「エヘヘー／＼／＼私さ、男装してみたかったんだよー

だから学校とかでは、男風の口調だからそれで宜しく――

那月：「…………（遠い田）

リタ：「なつ／＼／＼は、早く行くよ――」

久しぶりに照れた横顔を見ながらリタは戸惑いなく、【リタ】と書かれた靴箱を開けて、田の前にあつたローファーを取り出した。

リタ：「では、参りましょ」

＝走りながら……＝

那月：「ねえリタ――！」

リタ：「何ですか？」

那月：「学校の行き方、知ってるの――？」

リタ：「勿論です ついさっきまでパソコンで雷門中までの行き方をこの頭の中にしつかりと叩きこみましたので」

そう言いながら私の横で走る学ラン姿のリタ。

…やっぱり可笑しいかな…。

= そして… =

やつぱり陸上部に所属していく正解だったかな…。

私もリタも、余り息が荒れていなく、まだへつてやうつて感じだった。

安心していた時…すぐに悲劇は起きた。

すぐ目の前にある「」箱の中にサッカーボールが飛んできた。

那月：「もうファイフスセクターは来てるって事ね…」

やつぱりながらグランドを見た。

するとそこには…剣城京介と松風天馬、音無春奈、久遠監督が居た。

第3話 サッカー部

遠くからで何を言っているのか…よく聞こえなかつたけどアニメを見てなんとなく分かる。

話しているにつれて、天馬が危険な状態に陥つているのが分かつた。

那月：「もうちょっとしたら…ファーストの人たちが来るはず…」

リタ：「部室の部分は、私がやるね」

那月：「あ、ああ…まあよろしくね…」

リタ：「うん、あはははは」

すると、剣城京介が怒つて天馬に向かつてノーマルショートを打つた時だつた…。

違う方向からもう一つのサッカーボールが凄い勢いで天馬を守るようにして放たれた。

そして…時間が経つにつれ、剣城京介が指を鳴らすのと同時に背後から黒色と黄色いユニフォームを着た10人の人たちが現れた。

リタ：「部室前付近の、木の陰に居るね」

那月：「分かつた？」

リタが向かつてから数分、剣城京介が片手にボールを持ちながら高くジャンプをしてその持つていたボールを蹴った。

誰もが壊される…と、思った時木の上から飛び降りては、リタがボールを高く上げてそれからリフティングを始めた。

リタ：「那月……！」

リタがそういうとこに向かってボールを蹴った。

私は「はいーーー!?」と、小声で咳きながらも来たボールをリフティングしてから、剣城京介に蹴り返した。

皆：「……」

倉間：「誰だアイツ、」

速水：「転人生でしょうか……？」

南沢：「いや、もう一人の女は断然違うだろ。私服っぽいしな」

神童：「……」

剣城：「チツ。誰だ……」

那月：「……へへ（脱走）」

皆：「「ポカーン……」」

リタ：「あ……那月が逃げた」

“ インサッカー塔にて ”

私はそのまま逃げるとサッカー部の部室でもあるサッカー塔の試合会場（練習場）に来ていた。

そこには沢山の生徒たちも居て、興味津々だった。

那月：「うん。絶賛かも~~~~」

そう言いながらビックの椅子に座りついた時だった。

黒いコートを羽織つて、サングラスを掛けた男の人たちがやつてきた。

男1：「お嬢さん、この学校の生徒でしょうか」

那月：「一応、今日から入るという形なんです（ここから…どこかで見たよ…）」

男2：「道案内をしてしてくれませんか？理事長室に用があるのですが…」

那月：「すみません…私、今日来たばかりで余り分からいんです
…他の方に聞いてくれませんか？」

そう話をしているうちに試合が始まった。

男3：「君でなければ困る。付いて来て貰おつか」

そう言った途端、私は椅子を使って逃げ出した。

男2：「追え！…逃がすな！…！」

と言つて私が外に出た瞬間、リタがトンファーを持って、待ち構えていた。

リタ：「ijiは、任せろ。その間に那月は非常口を使って一階のグランドに向かってください」

私は「分かった」と言いながら、心中で（何でグラウンド…それに男口調なんだ…）とか思いながらも走つて、非常口からグラウンドの方に向かつた。

そして…私が辿り付いた所はまさしく…さつきまで一階で見ていた所とは違つて、試合会場（1F）に辿り付いてしまつた…。

監督：「…？…お前は誰だ？」

と、言いながら私に近づいてきた久遠監督。

那月：「私ですか？」

転入生の愛風那月ですが…？」

私がそう言い終えた途端、前半終了の笛が鳴つた。

監督：「…愛…風…那月か…頼みがある。」

那月：「何ですか？」

監督：「今だけこの試合に出でてくれ」

那月：「…・・・はい…い…！…？」

リタ：「おー…那月ーガンバレー…」

那月：「リ、リタ！？ いつからそこそこ？？」

リタ：「え？ 今？」

那月：「答えになつてないし……」

監督：「……確かに部室の破壊を防いでくれた……」

リタ：「おー……まあ、そあですが……」

監督：「お前も試合に参戦（（リ「却下」…なら、愛風那月、出でくれないか」

那月：「わ、私！？」

監督：「今だけでも構わない。お前の力が必要なんだ！？」

そつ言いながら久遠監督は、頭を下げて來た。

リタ：「出であげればいががですか？」

那月：「リタまでー？……はい……」

そして…

33番のユニフォームを着ながらベンチの前に立っていた。

立っていた…といつよつ、監督の話を聞くはめになっちゃった訳だ
しね…。

それに話によると一人、試合中に抜けていつたらしこし…。

監督：「とこいつ事だ。任せたぞ」

那月：「分かりました。はあー…」

リタ：「がんばってください…いつてらしゃい（小声）」

監督の横で私はすつじく嫌そうな顔をしながら立っていた。

監督：「水森竜也に変わって、愛風那月」

皆..「！！？」

そして私は溜息を付きながらフィールドに入つていった。

MFの位置に付くと、誰から声を掛けられた。

？：「愛風さん、俺はこのサッカー部のキャプテン、神童拓人。
さつきは部室の破壊を止めてくれてありがとう！」

那月：「ああ……あれはリタのおかげでもあるよへへ」

神童：「リタ……？」

那月：「ほら、あそ」に・・・・・いない・・・

置き手紙：『拝啓 那月様へ

僕は用事を、思いだしたので少し空けます』

そんな事を言つた途端、また再開の笛が鳴り出した。

剣城：「・・・チッ。またお前が「

そう言いながら剣城京介が、舌打ちをしているのも気づかずに居た
私だった。

六六六六六六六六六

キックオフは、剣城京介からだつた。

剣城京介は、ボールを取ろうとしている神童君に対しても、他の人にボールをぶつけて怪我をさせようとしていた。

それが次第には天馬君・神童君・私以外の人まで広がり、皆は立つので精一杯という感じだつた。

確か…もう少しで天馬君のドリブルがあつて、その次に化身で…神童君の化身だつたような…。

「いいやるしかないよね…。

そう思つた私は走り出して、霧野君に当つとじていたボールを軽くカットしてリフティングを始めた。

剣城：「……チツ」

舌打ちをしながらも剣城京介は、私の元に向かつて来てカットをしようとしていた。

それでもボールを素早く動かしながらリフティングをしているボールには一切触れる事が出来なかつた。

そのボールを高く上げると何Mも離れていてもお構い無しに威力を強めたノーマルショートを打つた。

すると…敵のGKは体ごとゴールの中に入つていった。

「「嘘だろ…」」

「「そんなバカな！…！」」

「「アイツ、何者だ……！」

音無：「あのゴールキーパーから……？」

それは、他の部屋で見ていた理事長や校長も、その光景に驚いていた。

那月：「あ……入っちゃった（棒読み）」

すぐ真横に居た剣城京介はその行動に腹を立てていた。

剣城：「貴様……よくも……！」

那月：「サッカーフィーバーのものでしょ？それに腹を立ててどうするの……」

剣城：「もう一辺言つてみる……！」

そう怒鳴りながら襟元を掴んで、殴りつと腕を上げた時だった。

？：「おや？試合中に相手に喧嘩とわ感心いたしかねますねしかも
女の子相手に」

という声とともに、剣城京介にボールが飛んで来て、剣城京介がお腹を抱えて蹲つていた。

その光景に誰もが驚いていた。

そして私は耳元で『私には余り手を出さない方が身の為だよ。』と言つておいた。

その後も敵の人たちは私に余りパスを出さないように心掛けていたらしかつたけど…オレンジ色の髪の人が剣城京介にパスを回そうとした時、カットした。

だけど今度はカットをしに来たのは、剣城京介を入れてFWが一人、MFの一人で計5人だった。

私はそれでも平気な顔で5人と戦つていた。

那月：「それでも管理組織なの？」

剣城：「……黙れー！……！」

その隙を突いて、剣城京介が前に出て来た途端開いた穴から出て来たノーマルショートで点を決めた。

私が喜んでいた時、ベンチから怒鳴り声が聞こえた。

黒木：「何をしているのです！……直ちに倒しなさい！……！」

11人：「はい！」

神童：「……」

三国：「アイツは、何者なんだ？」

霧野：「アイツらから一点も奪つて、さつきも五人相手でも勝つて、凄すぎる」

速水：「これなら、ファイフスセクターに勝てますねー！……！」

そんな夢のよつた時間は、じつはまだつた。

何故なら……怒り狂つた黒木という人が何か、剣城京介に指示を出したらしく、化身を出す体勢に入ったのだったから……。

那月：「へー。そつか。だけどそんな事言つてゐるけど一度足りとも
私からボールを奪つてないでしょ。

それで君は…どうでるのかな?」

リフティングをしながら言い返した。

そう言いながら化身もひとめこむに向かつて来た。

リフティングしていたボールを取ろうとしていた剣城京介は私の罷に気づかず、そのまま無我夢中に突進するのだけだった。

化身だろうがなんだろうが…雷門の人たちを守るためにもあつたか

ら余り回す訳には行かないし…。

そしてもう一点、入れた時だった…。

「「そこまでです…」試合はこれにて終了です…」

と立ちながら黒の騎士団とか言つ人たちのところに歩み寄つた。

第4話 サッカー部、廃部？

剣城：「何故です！！黒木さん！！」

黒木：「これ以上何やつていても変わらぬ気が無かつたからですよ、
剣城君」

剣城：「……ツ……」

黒木：「それと…愛風那月さん、貴方には感謝をしますよ。
貴方のよつな素晴らしい選手は他には居ません。

化身に意図も簡単に立ち向かうなど…素晴らしい事です。
宜しかつたら、聖帝の元、ファイフスセクターになりますか？」

皆…「！…？」

那月：「ファイフス…（）「ふざけんな…ドカスが…！」あ…リ
タ…」

黒木：「ド…ドカス…？」ほん…その君、名は何だね？」

リタ：「貴様に、名乗る名は無い」

皆…「 「（（睡然…））」」

黒木：「…良いでしょ？…貴方の事をよく覚えておきまくよ…」

リタ：「覚えるな…氣色悪い…」

何も言えない私 + サッカー部たち。

ともかく危険な不陰気が流れている事だけが確信していた。

両者、どちらもが付く程の殺氣を出して實に怖い…。

黒木：「…では、参りましょ？」

リタ：「もつ、田の前に現れるな…」（小声）那月に気持ち悪いのが移る

那月：（リタって…こんな感じだつて…うん、こんな感じだつたね…うん）

そして、転入生として私たちは先生に、案内され2年C組に来てた。

那月：「ああ、どうしようドキドキしてきた」

リタ：「大丈夫ですよ。リラックスですよ」

那月：「う、うん…あ、そう…え、リタあのあと、大丈夫だった？」

リタ：「あのあと？」

那月：「うん、サッカー場でのことだよ」

リタ：「ああ、あいつらか…今頃どかで、逆さになつているのでは？」

那月：「え、逆さ？」

リタ：「はい！」（笑）

私たちがこんな会話をしているうちに、先生に呼ばれ教室に入り、教卓

の横に立つた。

先生：「はい！今日から入る、愛風那月さんと、雲雀リタさんです」

那月：「愛風那月です。部活は帰宅部です。」

リタ：「雲雀リタです。同じく帰宅部ですよ。…那月を泣かしたら…フフフフフ」

クラス「……………」

先生：「え、えっと…はい…てゆう」とのなので、みんな仲良くしてね」

那月：「先生あの席は…」

先生：「えっと…一番前の席と一番後の席よ

那月：「えっと（リタ：「先生…」

先生：「はい？なんですか？」

リタ：「僕は後ろが、いいんですが…」

那月：「え？ り、リタ」

リタ：「（小声）やはり貴方は、神童拓人の隣が良いですね？」

那月：「え！ …う、うん…？」

リタ：「では、良いですよね。…と言つ事なので僕が後ろで良いですかね？ 先生？」

先生：「あ、はい。じゃあ、神童君の隣が那月さんで、霧野君の、隣がリタさんね」

那月・リタ：「はい！ / わかりました。」

第5話 転人生、那月視点。

そのまま私は椅子に座ると、小声で『よろしくね。』と言つた。

神童：「小声）うん。よひしへ、愛風さん。

それと…さつきは俺たちサッカー部を助けてくれてありがとう。」

那月：「いえいえへへ困った時はお互い様つてよく言つでしょ？」
それに久しぶりにサツカツ出来て楽しかつたしねへへ

神童：「え、あ、うん……（久しぶりにだつて……？それであんなにも強力なシューートを打つって言うのか……？）」

那月：「ん？ どうしたの？」

神童：「……いや。そういえば…部活、帰宅部って言つてたよな？」

那月：「え？ うん… そうだけど？」

次の一言葉...絶対に“良かつたらサッカー部に来ないか”って言われる
ような気が

神童：「あんなに強いキックを持つているのに何でサッカー部とかに入らないんだ？」

那月：「えっと…私、サッカーは好きだけど体が弱くて…つい最近まで入院中だった訳で…」

神童：「へえ……そうだつたんだ……」

神童君。

「めんよシ―――! そんな嘘を付いてしまった私を許してシ―――! 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4924z/>

【イナズマイレブンGO】二人のシード、時空を超えて物語を変える
2011年12月17日22時56分発行